

TOKYO 2020

オリンピック競歩・マラソンの救護に参加して

松田整形外科記念病院 益田 洋史



私は、札幌市で開催されたオリンピックの競歩・マラソンの救護活動に、会場統括として参加させていただきましたので、ご報告いたします。

暑さを避ける目的で札幌開催になった競歩・マラソンですが、例年の北海道マラソンは、多くの選手が熱中症で救護テントに搬送されてきます。熱中症への対応が救護活動の最大のトピックであり、研修会などで対策を練って臨みました。

当日、やはり多くの選手が熱中症で搬送されてきました。理学療法士は医師・看護師らとともにチームとして対応し、アイシングやストレッチなどを行いました。また、重症者にはアイスバスやアイスタオルといった方法を用いることで大きな効果が得られました。これは、世界の主要大会で導入が進められている治療法であり、新しいスタンダードに触れることができたのは、意義のある経験だったと思います。

今回のオリンピックは、COVID-19の影響、急な競技開始時間の変更など、参加した救護スタッフにとって非常に準備が難しい大会だったと思います。それでも、難しい仕事をやり遂げ、大きなトラブルなく大会日程を終了することができました。これは、今後のスポーツ現場活動、噂される札幌オリンピックなどの大イベントに向けて、大きな財産となったと思います。私自身も、長く続けている北海道マラソンや陸上競技大会での救護活動に、今回の経験を活かしたいと考えています。

東京2020ポリクリニックの勤務を終えて



北海道科学大学 井野 拓実



まず始めに、困難な社会情勢の中、五輪に携わった組織委員会や関係各位、送り出してくれた職場と家族、そして地域医療を支えるために参加を見送った多くの仲間達に心より感謝と敬意を表します。

私は東京の選手村に開設されたポリクリニック(総合診療所)にて、約3週間にわたり理学療法士として活動させていただきました。ポリクリニックのPhysio&Fitnessはまさに、日本のスポーツ理学療法士やトレーナー達のドリームチームで、ホスト国として総力戦で各国のアスリートをサポートしていました。学会や研修会とは異なり、同じ空間で「臨床」を共有できたこの活動はとても貴重なものであり、これは私達にとっての大きなレガシーとなりました。また北海道の理学療法士としては、2016年の冬季アジアオリンピック(札幌)大会にて活動した多くの道内理学療法士が今東京2020大会でも活躍しており誇らしく思いました。

また、選手達の様々な舞台裏や各人各国のドラマにも触れることができ、多くの感動と勇気もらい、改めてスポーツの価値と素晴らしさを実感しました。



活動報告

パラリンピック選手村総合診療所の理学療法サービスを経験して

札幌医科大学 青木 信裕



私は、2021年8月24日から開催されていた東京2020パラリンピック競技大会において、選手村開村の8月17日から26日まで選手村総合診療所で理学療法部門スタッフとして活動しました。

選手村総合診療所は世界各国の選手・役員に必要な医療サービスを提供する診療所であり、理学療法部門では期間全体で約1000件の利用があったそうです。パラリンピックの選手は現在対応すべき問題とは別に基礎的な疾患・障害を有している方々が多く、身体機能に関する幅広い知識が必要でした。また、多言語が飛び交う環境であり、理学療法評価・治療技術だけでなく、対象者とのコミュニケーションにおいても緊張感のある業務でした。スポーツマッサージや鍼灸、カイロプラクティックのスキルで対応する他の関連職種と協力しながら理学療法サービスを提供し、選手の状態が改善して表情が変わる様子を間近で見ることができたのは日常では得難い経験でした。

今回、このような貴重な経験をすることができたのは、大会運営に携わった多くの関係者、理学療法部門スタッフの推薦を取りまとめた日本理学療法士協会、理学療法部門のスムーズな運営に寄与されていたスポーツ理学療法を専門とするコアスタッフ、大変な状況の中で大会へ送り出してくれた職場と家族のおかげです。皆様に深く感謝申し上げますとともに、この経験を今後の様々な場面で活かして参ります。



車椅子ラグビーの選手用医療サービスを構築して

旭川医科大学病院 塚田 鉄平



私は北海道理学療法士会からスポーツ理学療法サービス主任候補として推薦をいただき、車椅子ラグビー会場の選手用医療の理学療法士主任として関わりました。

車椅子ラグビーは車椅子同士が激しくぶつかり合うコンタクトスポーツです。専門外の競技であったため、準備段階で車椅子ラグビー日本代表トレーナーの中村奈津美先生や中村飛朗先生(北海道せき損センター)には、休日にも関わらず選手の特性や競技特性、ルールを教授していただき、応急処置などを討議し大変お世話になりました。

コロナ禍での運営準備はサービスマニュアルの作成やスタッフの欠員に伴う補填が大変でした。集合研修が行えなかったため、オンライン講習の開催で知識を補いました。大会中は、各地から集まった理学療法士と医師、看護師で意見交換をしながら、毎日救護練習を行いました。あまりに迫真の搬送練習に会場スタッフから『紛らわしい』と怒られたのは良い思い出です。大会中に転倒は、104回ありましたが、おかげさまで大きな搬送事故なく終える事が出来ました。

最後に選手をずっと支えて来たスタッフや家族でも会場に入れないうち、公式練習から日本チームの銅メダル獲得の瞬間まで世界レベルを肌で感じられた毎日が至福の時間でした。今回の活動を支えていただいた全ての方に感謝いたします。そして今後は、障がい者スポーツ支援部の活動を通じて理学療法士がパラスポーツに関わりやすい状況を作っていきたいと思っております。現在はパラスポーツに興味にある方を集めたオンライン懇談会を企画しています。ぜひご参加ください。

